

【ポスター発表】

終末期ケアにおける Inter Professional Work

—地域レベルでみた IPW の実態と課題—

○ 佛教大学大学院 氏名 杉本 浩章 (会員番号 3954)

キーワード：終末期ケア・IPW・ケアの質

1. 研究目的

今後、年間死亡者数の急増が見込まれる中、質の高い終末期ケアを実現する方策として Inter Professional Work (以下、IPW) の重要性が謳われている。終末期ケアにおける IPW を取り上げた研究の蓄積は進みつつあるが、その多くは実践報告であり、1 施設内における IPW を取り上げたものや IPW の成果を測る評価指標が明確でないなど、研究・実践上の課題となる事からは多い。

地域包括ケアシステムの推進と同システム下での看取りの増加を踏まえれば、効果が実証された円滑な IPW の実践が求められる。そこで、地域内の多機関・多職種による IPW の実態と課題を明らかにするために調査した。

2. 研究の視点および方法

対象は、終末期ケアに携わる多機関・多職種で構成する 5 チーム・11 職種・23 人。各チームのメンバーはそれぞれ

表 1 ケアの質を高める 4 条件

共通のケースに携わっており、当該ケースにおけるチームの IPW の実態を「ケアの質を高める 4 条件」(樋口ほか 2010) を

条件 1	本人・家族の意思表示があること
条件 2	ケアを支える介護力やサポートがあること
条件 3	終末期ケアを支える医学医療ケア
条件 4	本人や家族の願いを実現するためのケアマネジメント

もとに比較した。各チームのメンバー構成は以下の通りである。

- A) 3 人 (訪問看護師、看護師、介護支援専門員)
- B) 3 人 (訪問看護師、看護師、介護支援専門員)
- C) 9 人 (保健師、介護支援専門員、MSW、医師、PT、OT、ST、CW、福祉用具専門相談員)
- D) 3 人 (訪問看護師、介護支援専門員、CW)
- E) 5 人 (訪問看護師、介護支援専門員、PT、CW、福祉用具専門相談員)

方法は、質問紙を用いた郵送調査であり、チームメンバーはそれぞれ独立して回答・回収した (回答内容は 2016 年 2 月 1 日時点)。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会「研究倫理指針」に準拠し、日本福祉大学における倫理審査を経て実施した。

#### 4. 研究結果

「ケアの質を高める4条件」を表しうる項目の把握・認識の一致状況を示す。条件1(表2)では、専門職等から把握した情報として、A・B・Eの3チームで「本人が望む死亡の場所」の認識が一致

していた。しかし、いずれも一致内容以外の情報を持つメンバーがおり、すべての情報が共有されていたわけではない。そのことは、他の2チームも同様であった。

表2 本人が望む死亡の場所 ※数値は実数

	本人から把握	家族等から把握	専門職等から把握
A	自宅1、不明2	自宅で一致	自宅で一致(病院2)
B	自宅1、不明2	自宅で一致(病院1)	自宅で一致(病院1)
C	未決定1、不明8	自宅 or 病院1、病院1、未決定1、不明6	自宅 or 病院1、不明8
D	自宅 or 病院1、不明2	自宅 or 病院1、不明2	自宅 or 病院1、病院1、不明1
E	病院1、不明4	病院1、不明4	不明で一致

条件2では、1チームで介護力の認識に大きな開き(介護力がある～やや劣る)がみられた。また、そのチームでケアの質を高めるための課題として挙げられた内容は、介護者への情緒的支援、フォーマルな介護力の強化などに意見が分かれた。

条件3を症状マネジメント(不穏)の認識状況でみたところ、いずれのチームも完全一致がみられず、うち2チームでは「苦痛あり」と「問題なし」(苦痛が生じる状況がない)で意見が分かれた。また、人生の最終段階における医療についての本人との話し合い状況は、メンバーによってその程度が異なり、話し合っていることで一致したチームはなかった。

条件4にあたる生活の質を高める取り組みとして、すべてのチームで「多職種での取り組みが必要な課題がある」とするメンバーがいる一方で、「思いあたることはない」者も4チームで存在した。

チームとしてのケアの質の評価では、2チームは高評価で一致したものの、生活の質の評価には低評価や不明が含まれていた。別の2チームではチームとしてのケアの質が「わからない」とする者がおり、1チームでは高評価と低評価とに別ればらつきがみられた。

#### 5. 考察

メンバー個々では貴重な情報を把握するも、チームとしての情報共有は、よりケアの質を高めていく点で課題がみられた。専門性や関係性などにより、把握する情報内容や重視の度合いは異なることを前提としつつ、「チームで持つ情報」へと発展させるIPWが求められるのではないか。その取り組みは、メンバー個々のケアの評価だけでなく、チームとしてのケアの評価の視点を強化し、チーム力を高めることにつながると思われる。

**文献** 樋口京子・篠田道子・杉本浩章・ほか編(2010)『高齢者の終末期ケア—ケアの質を高める4条件とケアマネジメント・ツール』中央法規出版。

本研究はJSPS科研費26590120の助成を受けたものです。